

# 交流

会報第9号  
2004年10月

発行責任者

フリッチー長谷川雅子  
ヴェップファー鈴木理香  
モジマン中西生子

スイス日本語教師の会  
Verein der Japanisch-Lehrkräfte in der Schweiz  
Association des Enseignants de Japonais en Suisse  
www.kyoshi-kai.ch

## 歩み

スイス日本語教師の会の誕生、発展に尽力され、1993年の発足以来会長を務めてこられたスルツベルゲル・三木佐和子さんが今年度勇退なさいましたが、当時の思い出などを綴ってくださいました。まさに「我が子」として心血を注いで会を育て上げたその思いとご苦労が臨場感を持って伝わってくるようです。また6年もの間、面倒な会計を引き受けてくださっていたフェイダー・石川佳世子さんも、会に参加なさってからの月日を振り返って一文を書いてくださいました。こうして私達が「交流」でき、セミナーなどで新知識吸収の機会が得られるのも、先達の努力と情熱の賜物であることに改めて感謝したいと思います。

## 礎石

スルツベルゲル・三木佐和子

誰でも忙しい時ほどちょっとした切り替えがほしいものである。ごく普通ではあるけれども、本を読むことで、それも止められないので「ちょっとだけ」と自分に言い聞かせて読むようにし、頭の切り替えをしている。最近、司馬遼太郎の30年以上前に読んだ『坂の上の雲』を読み返してみた。昨年のシンポジウムの準備時期から、大きな世界地図帳をひろげたまま置いておき、よく覗くようになった。日露戦争を挟んで展開するこの歴史小説の文中に、知っているようで、しかしどこにあるかははっきり知らない地名がでてくると覗きこみ、シンポジウムの参加申込み者があると、どこから来るのか地図で確かめてみた。小説の中のバルカン諸国の国名や、かつての戦時中の社交・情報の中心地になった欧州諸国や地方名などが、シンポジウム参加者の住所と重なるのである。これがとても面白かった。また、今までにセミナーや分科会で講演していただいた先生方は、色々な国に滞在し、活躍してこられた経験の持ち主で、日本語教育を通して面白い話が聞けた。そんな先生方の講義以外の送り迎えや打合せの際、準備、開催中も含め、思わぬハプニングがあった。書きとめていないので多々忘れていたと思うが、一つ思い出すと次々と芋蔓式に出てくるのである。冗談半分だが、だったら書いたら1冊の本が書ける程の量になるかもしれない。

1992年、スイス日本語教師の会創立の旨と協力を乞う手紙をスイスの公的機関や学校に出し、返事に礼状を出し、名前のわかった先生には電話連絡をした。その後、会設立に賛同してくれたスイス・リヒテンシュタインの先生方に、地域別にジュネーブ、チューリッヒ、クール、ベルン等で集まってもらい、出向いていった。あの頃スイスを縦横に奔走したが、ただただ文句も言わず完璧な子守りをしてくれた義理の両親に感謝するのみである。また93年冬に浦和での日本語教師研修に参加し、日本語教育新事情や教授法など実践に役立つことを勉強できたし、国際的なネットワークが広がった。子供が小さかったので、留守の間はお手伝いさんを雇ったのだが、予算オーバーで痛い思いをしたのも今は思い出の一つだ。

93年6月にスイス日本語教師の会が創立され、役員になったRoos泰子さんとチューリッヒで落ち

合った。チューリッヒで開催の「Japan Festival」に国際交流基金が協力していた関係で、ケルン文化会館副館長とチューリッヒで話す機会が持てた。待ち合わせの場所に行く途中にあったチューリッヒの町並みを、彼女の説明付きで散策しながら約束の場所に足を運んだ。彼女は日本語教師のみならず観光のベテランガイドでもあるのだが、2000年秋の分科会ときにはチューリッヒ・クローテン空港のそばの当時の「Swissair Training Center」が候補にあがり、下見に行った。その時どうしたのか、違う方向行きの電車に乗ってしまい、慌てて途中で乗り換えて目的地にたどりついたのがセンター閉館ぎりぎりの時間で、滑り込みセーフ。守衛さんに担当の方が帰らないように連絡を頼み、念願の立派な会場の下見ができた。そこで最新の設備や器具の操作を教えてもらい、義務を果たして帰路に着くことができた。冷や汗もの(!)だった。会場をそこに決めた理由は、中島先生がご自身の講義の後で次の講演の目的地スウェーデンに急がなければならなかったからで、先生の空港への案内役はもちろんRoosさんであった。また旧役員のFredenhagen淳子さんは仕事をきれいに仕上げ、客観的に意見をのべてくれた。慣れない教師会の運営やセミナー計画、講義や講演について知るために、また、何年後かに役員だったErneユイ子さんとドイツ教師会団体との協力および話し合い、文化会館からの講師派遣経費援助策、日本語事業課との直接連絡や日本語教育新情報収集をするためのノウハウ行脚にケルンに足を運んだ。最近ではヨーロッパ教師会などもでき、欧州全体の横のつながりができ、情報収集や他教師会との意見交換もずいぶん簡単になり、仕事ははやくなった。フランス語圏の役員参加は、フランス語圏の会員の意見を拾い上げるのに大事であると思う。旧役員のKisslingさんとは、彼女の日本語の授業があるヌシャテルのホテルでのセミナー会場の下見や、ジュネーブ大学日本学二宮正之教授の研究室へ一緒にインタビューに出かけた。やはりその地の言語ができるのは便利で運営上効率があがる。分科会は基本的に講師の先生が短時間で来られることを考慮し、ラインフリード先生の講演のときと、Loosliさん、Landoltさん、Nelsonさんのパネルディスカッションのときはチューリッヒ・リートベルグ博物館で、それから、二宮前教授のときはジュネーブ公使館で、慶応大学小屋逸樹教授のときはご家族の住むバーゼルで、と講演場所を選んできた。日本大使館文化会館ができるまでは、オルテンやルツェルン、ヌシャテルなどのセミナー会場の下見

も、役員の2、3人がチームを組み足を運んで、セミナーの日程内容は言わずもがな、宿泊費のキャンセル料金の交渉から食事の内容、支払いまで「何でも屋」を引き受けてきた。食事がまずいときは、参加員から直接または間接的に囁きたる非難の声が上がって、胃袋の満足度の大切さを感じたものである。胃袋と言えば、衣がカリッとしていて、あんこのたくさん入った萩田さんの鯛焼きは忘れられない味、と今でも語り草で、また会員達のお手製ケーキ、和菓子、極秘の自家製サラダソースの掛かったサラダなど、忘れられない味で一杯である。それか急遽昼ご飯のお弁当運搬係をしてくださったご主人達などの「家族の協力」も忘れてはならない。家族と言え、その頃は今のようにメールもインターネットも普及していなかったので、電話連絡が多く、ましてや前例がないので決める事がたくさんあって、家族に気を使いながらの私達の長電話は、イライラやちょっとした夫婦喧嘩の種を作っただろうと思う。

一番最初に澤井康子先生にお目にかかったのはドイツのケルン文化会館だったが、経費も出ないし時間もなかったので、主人の提案でイギリスの休暇帰りを利用して、鍋釜を詰めたキャンピングカーで埃まみれの家族全員を引きつれて文化会館に立ち寄った。当時小さかった子供達は、じっとしていなかったもので、父親が炎天下の駐車場で遊ばせてくれていた。先生方や会館の方々とあたふたと話し合いをすませ、2階の窓から外を見ると「おかあさん、まだなの～」と子供達が大声をあげて手を振っていたのが昨日のことのような気がする。記念の第一回、第二回のセミナーはベルンとオルテンと2回連続で澤井先生が講師をしてくださった。先生は「スイスに2回来ただけけれど、スイスのどこも見せてもらえませんでしたよ。」と苦笑いされ、新教材や日本語教授法などについての会員からの質問攻めにあわれながらも「先生として嬉しい悲鳴ですね。」とおっしゃられた。再度ケルン文化会館に国際交流基金からの日本語教育アドバイザーとして赴任されてからも、報告書を受け取る毎にスイス日本語教師の会会員の皆さんが成長しているのが手に取るように分かりとても嬉しい、と常に当会の様子を気にかけてくださった。また当会の名の下で活動を続けている教材開発グループが、2003年度の国際交流基金援助枠の経費支援を受けられることになった。グループの努力の賜物である。この教材グループの活動初期に会から基金へ日本語アドバイザーを申請した結果、望みが叶ってバーゼルでケルン文化会館の久保田美子先生の指導を受ける事ができ、グループの仕事の延長線を引くのに一役買ってくれた。

調査の結果から日本語を勉強する人達は、日本に興味のある学生や社会人達、日本語を継承語として勉強している次の世代を担う子供達、日本人のパートナーなどであるとわかった。その中にはマンガ好きの若者達も多いことだろうし、ギムナジウムの生徒たちも加わり（若者達はまた辞めていく回転も早いのだが）、益々日本語学習者の年齢層が引き下げられている。80年代ほどではないが、コンスタントに増えている。スイス軍隊にも、和平のため、世界中で起こる災害救助を支えるために「Language Specialists」をおいて情報収集・提供の手助けする部門があり、多数の言語の中に日本語も入っている。高等教育における日本語も、1999年「ボローニャ宣言」での欧州29カ国の高等教育担当官による選択であり、ヨーロッパ全域の透明性やモビリティをはかるため、ヨーロッパ単位での統一規格導入が急ピッチで行なわれている。スイスは教育面でも積極的にヨーロッパ枠内に参入している。日本語教育がどう参入していくかがこれからの課題になるだろうし、日本側からの期待も大きい。

定例総会で「怖いお姉様方」の名称を貰ったとはいえ、能力ある「妹達」が役員に加わってくれたお陰で今までの運営が円滑に行なわれた、といっても

過言ではない。5名の役員が途中4名になったのは、経費削減に一役買うだろうと思って一名減らすことを決定したのだが、1人が病気、2人が休暇中で、セミナーの前に1人で仕事を背負い込んで大変だった、という時期を経験したことから、またもとの5名の役員構成に戻った経緯もある。お願いして役員の仕事を引き受けていただいた皆さんは、仕事や時間の面で無理をしたりして、家族との板ばさみになり、さぞかし大変だったであろう。外への顔であり内での受け皿役をしている「ホームページ」やニュースレター『交流』の編集グループに、「継続は力なり」と感謝の気持ちを伝えたい。皆さん、お手伝いありがとうございます。我家の子供達はいわゆる日本語の先生が母親なのだが、紺屋の白袴で日本語の読み書きができない。本当に残念だが、「会」というもう1人の子供の誕生と成長があって手一杯だったという逃げ口上を常に用意している。だからこそ、心からの反省として「会員の皆さん、お子さんの日本語、頑張ってください！」とエールを送りたい。スイスは小国であり、人口が少くないという根本的に変えられない事情があるが、常に情報を吸収し活性化して行かねば、日本語は他の外国語に押しやられる言語のまま消えていってしまう。教師会に何が出来るか、会員となって何のメリットがあるのか、これは現実には日本語教師の職場教員や生徒数に影響されるだろう。一問の問いは当然ながら、会員としてどう教師会に関わっていくか、また協力しているかが会の存続に繋がっていくと私は思っている。



あつという間に月日が流れて・・・

FADER 石川 佳世子

月日のたつのが恐ろしいほど早く感じるようになった・・・と思い始めて早数年。何かの本で、それは刺激のない日々の繰り返しの生活が長く続いているせいだ、と読み、がっかりすると同時に、「まあそうかもしれない」とうなずいてみたり・・・。何が言いたいのかと申しますと、日本語を教え始めて17年目が終わろうとしていることに、私自身はかなりおどろいているのです。スイス日本語教師の会には設立当時からお世話になっているのですから、その17年中10年半、ということは半分以上の月日をお世話になってきたわけです。10年と言ったら生まれた赤ちゃんが小学校3年生になったということですから、感慨深いです。（こういう例え方をするようになったのも年を食ったせいだろうか？）

初めてセミナーに参加した日のことは今でもはっきりと記憶しています。10年前と言えば、既に日本語教師としてジュネーブで教え始めて数年経過していたとはいえ、今ほど生徒を抱えてはいませんでしたから、まだまだ経験不足の駆け出し教師の心境でした。ましてや今ほど充実した教材などなかったような時代、インターネットなんて便利なものが生



何回かあった問い合わせは、「スイスのギムナジウムで日本語コースを開くための教材」や「スイスのバイリンガルの子供たち向けの教材」「スイスでスイス人の年少者に教えるための教材」についてでしたが、参考になるものはあるものの、まだまだ未開発の分野といえるでしょう。

前回の寄贈で、追加されたのは『かんじだいすき(一)(二)(三)』(それぞれ小学校1年から3年の漢字を扱っている)と『光村ライブラリー全18巻』です。『光村ライブラリー』は、日本の光村図書の教科書に載ったお話を集めたもので、低学年向け5巻、中学年向け6巻、高学年向け6巻、詩を集めたもの1巻からなっています。良質の年少学習者向けの読み物です。お問い合わせいただければ、内容をお知らせします。

対象者外でも有用と思われるのは、ご存知の方も多いと思いますが、『モジュールで学ぶよくわかる日本語①、②』です。これは、オーストラリアの中等教育の場で開発された中・高校生向けの教科書ですが、テープのついた聴解問題や、会話練習用のワークシート、簡単な読解練習など、ひとつのテーマに沿った場面でコミュニケーションを進めていくのに必要な文型、語彙、表現などを練習していく形となっており、補助教材として利用できます。

この分野でも、最近になって出版されたものはいくつかあるので、そういったものも増やしていけたら、参考図書としては、役に立つのではないかと思っています。もし、この分野で面白い教材をご存知でしたら、ぜひお知らせ下さい。

第3網の目文庫 管理者  
クレニンまどか

## <ベルン日本語教室訪問>

ベルン日本語教室は来年開校10周年を迎えます。毎週水曜日の14時から15時30分まで、レベルの違う4クラスが同時進行で授業が行われます。去る6月9日、この教室を訪問し、お母様方にも少しお話を伺う機会がありました。授業のために多くの時間を割いて頑張っている講師の方への謝礼が余りにも少なく、ほとんどボランティア同然で申し訳ないという声も聞かれました。

### ① クラスについて(担当の先生による、特色などの説明)

#### 青—15歳

青組はこの夏ひとりが卒業し、残るはたった3名になりましたが、おそらく最後になるであろうこの一年を実りあるものにしようと、教師を含め4人ではりきっています。内容的には教師が用意した生教材をもとに、漢字テスト、2分間スピーチ、新しい漢字の導入(5年生の漢字)と復習漢字の練習、新しく覚えた言葉を使っての例文作り、テキストの読解、テーマについて自分で調べたことの発表・意見交換などを現在はやっています。今学期からその月々に関連した社会問題や日本文化についてのテーマを多く取り上げるようにしています。人数が少ないということのプラス面を活かし、子供達に覚えてほしいことを押しつけるのではなく、子供達それぞれの興味をうまく授業に反映できるよう心がけたいと思っています。

(シュクリ知佐子)

#### 緑—10~13歳

生徒が辞めてしまい少人数になったので、もともとはふたつあったクラスが合併しました。ですから、複式のようなもので、授業の進め方も最初は大変だったのですが、だんだん、新出漢字の勉強以外には一緒に出来るようになってきました。漢字は復習に復習の反復攻めですが、それでも日常生活で目にしないものは記憶にとどまってくれず、環境というものが人間にどれほど大きな影響を与えているかを思い知らされます。授業では読む・話すが中心ですが、宿題には文章を作る、漢字を書くという作業を多めに与えるようにしています。

(ブンサラン北川澄子)

#### 赤—7~10歳

赤組は二年生下の教科書を使用して学習しています。男女各三人ずつ、ドイツ語圏四人にフランス語圏二人、それぞれ個性の違う子供たちが集まったバランスの良いクラスです。毎回授業の最初に漢字テスト、その後語彙、文章作成、課題発表等を行い、新出漢字の導入後、最後にグループでゲームやクイズをしながら勉強をしています。漢字テスト、ゲームの結果は表にしてあり、生徒は点数を競い合うことで楽しく学習しているようです。いつも明るい元気一杯のクラスです。

(ウルリッヒ京子)

#### 黄色—5~10歳

黄色組は、教師の会教科書制作グループで作成した『海外に住むバイリンガル児童のためのほんご1ねんせい』を使って授業をしています。スタート時10名でしたが、出入りがあって現在14名。年齢の幅が少し大きいのですが、家庭での日本語環境の差もあり、こうなりました。年齢差のでこぼこが、いい意味で作用するような授業を、と心がけています。スタートして1年半ですが、ここ半年ほど、毎週、絵日記の宿題を出し、それをみんなの前で読んで、質問したり、その話題をきっかけに、自分のことを話したりして、会話の幅を広げていく練習をしています。「話すこと」に重点を置くと、人数的にちょっと難しいので、今、2クラスに分けることを考慮中ですが、元気でよくまとまったクラスです。

(クレニンまどか)

### ② 大きな特色

日頃の学習の成果を、ベルン日本人会の新年会や親睦会で、劇・詩の朗読等の発表、文集の有料配布という形で披露しています。また、教室の運営は母親がすべて行っています。授業をしている間も、当番の母親が授業で使うプリントをコピーするなど、全面的に体制が整っている様子が窺えました。

### 3 成績表について

2003年度よりベルン州では成績表が変わり、一教科につき一枚の紙に詳しく成績をつけるという方式になりました。それ以前は課外科目とされていた日本語も、一般教科と同等の科目として認められ、日本語の読み書きだけでなく、日本文化の理解度や授業態度、出席状況も評価の対象になっています。

これは、ベルン州の「母国語文化教室(Kurse in Heimatlicher Sprache und Kultur 略称 HSK)」という組織に入っている、およそ20カ国の言語の教室の活動が認められたということではないでしょう

か。

最後になりましたが、ベルン日本語教室会長のブンサラン北川澄子先生やクレニンまどか先生、ウルリッヒ京子先生、シュクリ知佐子先生の皆様にはお忙しい中、貴重な時間を割いていただき、本当にありがとうございました。



写真：黄色のクラスの授業（2004年6月9日）

お腹をたたきながら、「たぬきが一匹、ポン」と、全員で助数詞の使い方を練習したり、輪になって座って絵日記を読み上げたりしました。生徒達は生き生きとしていて、とても楽しそうでした。

## 最近の「気になる日本語」

今年の秋の里帰りの際、レストランで店員に次のように聞かれることが、何度かあった。

「OOは、だいじょうぶですか。」

「OO」は、お代わり自由のお茶やコーヒーなどである。

杏林大学外国語学部教授の金田一秀穂氏は、「だいじょうぶ」が広範な意味合いで使われ始めていて、ここでは「いりますか」の意味であると『DIME』誌の中で解説している。

日本語の変化が見える、興味深い体験であった。(I.N.)

## 本の紹介

『できればしたくはないけれど-スイスでの離婚 (Alles Wichtige zum neuen Scheidungsrecht)』

この本は決して離婚の勧めではありません。題名が示す通り、できればしたくはないけれど、やむをえず離婚をする場合に役立てていただきたい本です。離婚に際し、知っておくべき実務的なことが中心に書かれています。私たちは「人生の一時期におけるパートナー」という言葉が「人生のパートナー」という言葉にとって代わられる時代に生きています(本文より)。スイスでの離婚率は50パーセントに及ぼうとしています。スイスに暮らす日本人も例外ではありません。スイスで離婚をする場合、自己主張の点でも、言葉の面でも、また知識の点でも、明らかに日本人の方が不利となるケースが多く見受けられます。離婚の手続きを始めた、あるいは

離婚を考えている日本人からの、母国語である日本語での離婚に関する情報を求める声が最近ますます寄せられるようになりました。やむをえず苦渋の選択をした、またしつとある同胞の一助になればと、この本を翻訳し、出版することにしました。また、離婚を視野に置いていない方にとっても、この国で暮らすための一知識として、本書は価値ある一冊となるはずですよ。

価格 48.00フラン (送料別)  
注文先 Louise Tomoko Stapfer  
Rütlistr. 80  
CH-8308 Illnau/Switzerland  
Tel: 052 346 29 53  
Fax: 052 346 29 54  
E-mail: tamakazura@bluewin.ch

## 編集後記

Schwarzenegger 竹本真砂子さんが役員に就任したために、『交流』の仕事から退くことになりました。今までどうも有り難うございました。今号から、Wepfer 鈴木理香さんが新しく編集部員として活躍しています。これからも『交流』をよろしく願いたします。

Fritchi-Hasegawa Masako	Feldmattenweg 2, 5722 Gränichen
Tel:	062/842 6605
Fax:	062/842 6605
Mail:	ursfri@bluewin.ch
Wepfer-Suzuki Rika	Obere-Farb-Weg 3, 8610 Uster
Tel:	01/942 4270
Fax:	01/942 4270
Mail:	rikasuzuki@freesurf.ch
Mosimann-Nakanishi Ikuko	Stadacherstrasse 51, 8320 Fehraltorf
Tel:	01/955 0094
Fax:	01/995 6135
Mail:	mosimann@asiaintensiv.ch